

演題：新しい科学哲学からみた精神医学の基本問題

－ 臨床家が主観的に抱く「了解不能感」はなぜ、
患者の「生物学的異常」の「エヴィデンス」なのか？－

演者：豊嶋良一（フリーランス精神科医、埼玉医科大学名誉教授）

講演予定メモ

はじめに － 本演題の関心事

1. 心身問題の「科学哲学」が精神医学の在り方を決める

心身問題とは「心と脳とは、いかなる関係性のもとにあるのか」という問いである。ここでいう心は「わたし」という当事者のみに体験され、他者からはその存在すら確認しえない存在を指している。それゆえ心身問題は、客観的観察が可能な事物を対象とする自然科学をはみだしたテーマである。従って、これに取り組む学問領域は形而上学や哲学と称される分野とならざるをえない。しかしながら、この問いに答えるには、現在、20世紀以降の神経現象についての知もわきまえていなければならぬ状況にある。

心身問題にどう取り組むか、あるいはこれをどう回避するか、いずれにせよ、精神医学者たちは意識的に、あるいは暗黙裡に、この問題に何らかの形で対応をしてこざるをえなかった。その対応姿勢は時代ごとに変遷し、精神医学の成因論・診断学・治療学の在り方に深い影響を与えてきた。この変遷史は今後、精神医学史の中であらためて論考されるべき課題であろう。

それはさておき、本演題では、古典的精神病理学の泰斗、シュナイダーが心身問題にどのように対応したかをふりかえり、以下に述べる2点に関心を絞り込むこととした。

2. 心身問題と精神病理学

シュナイダーは、精神症状を「第一群、心のあり方の異常変種」と「第二群、疾患（および奇形）の結果」に分けた。第一群と違って、第二群には身体的原因（「疾患」）が存在するとした。第一群にも身体的（形態学的あるいは機能的）変異を想定することは可能だが、これを「疾患」と考えることは出来ず、正常な精神生活にほぼ対応する身体的過程と基本的に異なるものではないとした。これに対して、第二群の異常についての知は、身体医学的（病因論的）系列と、心理学的（症候学的）系列の二系列に分けた。この立場を彼は、「経験的二元論（empirischer Dualismus）」と呼んだ。シュナイダーは、両系列には因果関係あるいは対応関係があることを想定しつつ、あえて両者の関係性の問題には立ち入らないようにしていると見受けられる。立ち入ることを避けた理由は、当時の生命科学・神経科学についての科学哲学が心身問題に立ち入るまでには成熟していなかったことにあるのではないかと演者は考えている。

ところが20世紀半から21世紀初めにかけて、生命科学に大革命が起き、新たな科学哲学が生まれようとしている（参照、伊東俊太郎）。素朴な心身二元論はほぼ完全に否定された。では、「脳科学的一元論」であらゆる精神症状を説明・理解することは妥当なのか。シュナイダー以後、半世紀が経過した現在、第一群における心身問題や、第二群における身体医学的（病因論的）系列と心理学的（症候論的）系列の対応関係はどのように理解すればよいのだろうか。これが演者の第一の関心事である。

演者の第二の関心事は、患者の生Lebenにおける「意味連続性の切断」である。シュナイダーは、循環病と統合失調症に特異的な症状が「疾患」によることの証拠として、この「意味連続性の切断」を挙げている。患者に相対した臨床家の内的・主観的体験の中に「了解不能」感が湧き上がり、臨床家はそこに「意味連続性の切断」を観取する。この事態が「疾患」の結果としてのみ生じると断言できるのは、いったい何故なのか。その理由を、新しい科学哲学に照らし合わせて、再検討してみる価値はあるだろう。この再検討の重要な一環として、新しい科学哲学は「意味」という「現象」をどう考えるのか、触れておきたい。

本論

1. 生命科学の大革命と新しい科学哲学

そこでまず、生命科学・神経科学についての科学哲学の現在の到達点のうち、精神医学に深くかかわる部分を演者なりにまとめてみたい。(20世紀後半、宇宙・生命・精神現象の科学には大革命が起きた。このことを大局的に論じた数少ない著書として、伊東俊太郎先生の「変容の時代」(麗澤大学出版会)が挙げられる。)

「人間存在」について、新しい科学哲学が生まれるきっかけとなったのは、下記の3領域の融合であったと演者は考えている。

①DNAがヒトを含む生命現象を司ることの発見とDNA進化学の確立

②生物行動学と霊長類の行動進化学がヒトの精神現象にも適応される可能性の発見、「普遍的無意識」の進化学(A.Stevens)の成立

③マクロシステムズ神経生理学(W. Singer)と「意識(主観的体験)」の現象学(Husserl)の照合・融合可能性の発見、神経現象学neurophenomenologyの成立(Francisco Varela、Georg Northoff、山口一郎)

この3領域で起きた「知」が融合した結果、まず③からは、科学最大の謎の一つであった「意識(主観的体験)」の機能を説明しうる神経現象の仕組みが推定可能となった(Varela, Edelman, Tononi)。その結果、心と脳を別々の存在とみなす心脳二元論は不要となり、心脳現象をもたらす存在に関する「存在一元論」が有力となった。

また、②からは、「意識(主観的体験)」のみならず、これを駆動する「普遍的無意識」も含めて、「人間存在」のすべては、生命進化の産物として説明・理解可能であることが明らかとなった。

①の生命進化・DNA選択の仕組みの解明から判明したことは、生命現象の根本はDNAによって司られていること、そのDNAは進化過程で、個体を超えた生命の存続により有利なものが選択されたということである。その帰結として、生命現象の全ては「個体の生存・生殖に寄与するという公理=合目的律」に従うことになった。すなわち生命現象における合目的性(「合目的律」)が創発したのである。こうした生命現象の合目的性の起源は、かつては神の創造にあるとされてきていたが、20世紀後半でのDNA進化学によってはじめて、合目的性が生命現象の進化原理から創発したものと理解されるようになったのである。

上述の「知」をすべて融合させるなら、心身現象の本体に関する「存在一元」仮定に行き着く。さらに演者は、この心身現象の本体に関する認識方法論や、本体そのものに関する「不可知性」をも想定に入れておく必要を感じる。われわれが「心身現象の本体」問題に、どういう方法で、どこまで迫れるのか。ヒトの知性自体もまた進化の産物であるならば、その知性には限界があるだろう。その限界がどこかにあるのではないか。こうした「本体不可知論」の可能性もまた考えざるを得ない。

2. 心身問題をめぐる「認識二面論」

ここで、われわれは「心身現象の本体」問題に、どういう方法で、どこまで迫れるのか、考えてみよう。最大の難問は、「精神現象」は当事者である「わたし」にしか、体験できないものであり、他者からはその実在性を確認することが出来ないということである。この点で、「精神現象」はこの宇宙・自然のなかで極めて特異な存在である。それゆえ演者は、精神現象を神経現象に単純に「還元」することは不適切であると考える。では、心(精神現象)と身体(脳)の関係を、新しい科学哲学ではどう理解するのか。新しい科学哲学では、両者は「心身現象の本体である一つの存在」を認識可能にする「二つの窓」として想定する。この立場を演者は「**存在一元・認識二面論**」と呼び、Habermasは「存在論的一元論、認識論的二元論」と呼んでいる。以下、これをわかりやすく、本体が写し出される「二つの画面」という比喩で説明してみよう。

まず、精神現象にも神経現象にも共通な、「本体X」が「存在」として仮定される。この本体Xそのものの全体は、誰にも直視できないがゆえに、その意味でその存在Xの実体は「不可知」であるが、しかしこの存在Xの実体が「われわれに認識可能なかたち」で映し出される「画面」が二つ、「内的側面」と「外的側面」の二つがあると考えてみよう。これら二つの側面(「二つの覗き窓」)をとおして、別々に、二通りに、われわれには本体Xを体験していると考ええる。

内的側面から眺められる第一画面Cは「主観的体験consciousness」という画面であり、ここに映し出される現象がすなわち、当事者の「わたし」だけが体験している「わたしの主観的体験」である。この第一画面Cを視て感じて体験できるのは当人の「わたし」だけである。この画面にはわれわれの内部から湧き上がってくるさまざまな体感・気分・感情・欲動も映し出される。

外的側面から眺められる、物的対象で構成される外的世界は、この第一画面Cの中に、「画面内の画面」、すなわち「第二画面C'」として、映し出されている。「第二画面C'」を含めての諸現象が第一画面Cに立ち現れる在り様を解明しようとするのがフッサールの「発生的現象学」である。一方、われわれによって客観的に観察可能な脳内ニューロン群協調発火現象NCC=Neural Correlates of Consciousnessは、各人の精神現象の本体Xが外面から認識可能な形で第二画面C'に映し出された姿であるとみなすことができよう。この第二画面C'に現れる現象は、まわりの人々のだれにでも、彼らの第二画面C'の中において、視ること・共有することが出来る。

当事者にのみ体験可能な第一画面Cも、第二画面C'に映し出されて誰にでも視ることが可能な客観現象としてのニューロン群協調発火現象NCCも、いずれもともに心身現象の本体Xを反映したものであり、両画面に映し出される現象には一対一の対応関係があると仮定される。こうした仮定はHabermasのいう、「存在論的一元論・認識論的二元論」の一種に分類されるだろう。

二つの側面から視えてくる所見(主観的体験と神経現象NCC)を照合することで、本体Xなるもののありようを推定することが可能となる。この認識方法は「神経現象学」と呼ばれている。ただし、こうして本体Xの存在を推定することは出来ても、本体Xそのものはあくまで直視不能であるし、またヒトは進化の被造物にすぎないという意味からも、本体Xそのものはヒトにとって「原理的に不可知」である、と仮定するのが妥当ではないか。

3. 神経現象に創発した「意味律Sinngesetz」

第二の関心事、「意味連続性」についての話題にうつろう。新しい科学哲学では「意味」という現象をどう捉えるのか。

前述の生命現象の合目的性は、神経現象も例外ではない。生命現象の合目的性の観点からみれば、ニューロン群協調発火という神経現象の目的は、一つは外界・体内の状況に応じて即座に

最適な行動を発現することであり、もう一つはその発火履歴を記憶し、神経回路網の結合パターンを合目的的に形成・修飾することである。神経現象の実体は、ニューロン群協調発火とその連鎖であり、発火パターンA(=情報A)が次なる発火パターンB(=情報B=情報Aの「意味」)を発現する。その連鎖反応の仕組みは、これによって「個体を越えた生命の存続」のための最適な行動ができる方向に進化した。その結果、神経回路網全体に「個体を越えた生命の存続という目的に合った(有意味・有意義な)情報伝達・変換規則」(=神経現象における合目的律=「広義の意味律Sinngesetz」)が創発し、動物の行動はこれに従うものとなった。

4. 情報と意味の定義、ニューロン群協調発火現象、「意識(主観的体験)」

ここで「情報と意味の定義(豊嶋)」を紹介しておこう。この定義は吉田民人、大橋力、Gregory Batesonの情報概念を総合して豊嶋によって完成された定義である。生命系・非生命系を問わず、一般的に、「情報と意味」は以下のように定義できる。「システムPにとっての情報Aとは、なんらかの物質・物理現象で形成された「時空間構造(パターン)」(その事物そのものではなく、事物で形成されたコト、パターン)であり、かつ、システムPに作用してそのシステムの内部構造パターンPを $P + \Delta P$ に変化させる機能を有するものである。情報Aが作用することによって誘発されるシステムPの内部構造の変化パターン(ΔP)が、そのシステムPにとってのその情報Aの「意味」である。

この定義によれば、ニューロン群協調発火の時々刻々の時空間構造P(パターン)は、まさしく上記の定義を満たす「情報」であり、その「意味」とは、次なる瞬間に生じる、当のニューロン群協調発火パターンの変化(ΔP)である。この変化は合目的的生命現象の意味律に従った変化である。こうして先に述べた第一画面Cに映し出される心的体験にも、第二画面C'に映し出されるニューロン群協調発火現象にも、ひとしく意味連続性が実現されることになる。われわれは、この「意味」や「意味連続性、合意味律性Sinngesetzlichkeit」を「内的」に、主観的体験として、前述の第一画面Cにおいて体験しているのである。

5. 「了解」とは何か？

ヒトの場合にはさらに、「言語」活動が神経現象の進化の中で発生した。その結果、「事物、モノゴト、自己と他者の言動の全体」の「意味」を、コトバを用いつつ(=記述しつつ)「了解」するという主観的体験・内的行動、「精神現象」が創発した。われわれは、他者の言動を含む諸現象の「意味」や「意味連続性」を「内的」に、前述の第一画面C(第二画面C'を含む)において「体験」し、その一部を言語で記述できるようになったのである。

6. 熟練した臨床家の内面に生じる「了解不能感」は何を意味するか？

熟練した臨床家の内面に生じる「了解可能／不能」感を上記の「新しい科学哲学」に照らしてみれば、「了解可能／不能感」は患者の神経系が「意味律に従っている／いない」を反映しているのである。この「了解不能感」は、その患者の神経現象の「意味律」を弛緩・破綻させる(=すなわち生命展開Lebensentwicklungの意味連続性を弛緩・破綻させる)何らか異常過程が神経系に侵入したことの確かな指標(エヴィデンス)であることが判然としてくる。さらに踏み込んで言うならば、生命展開Lebensentwicklungの意味連続性を弛緩・破綻させる過程を「質的異常(=量的ではなく)」と分類し、その診断単位を「疾患」に分類するのである。

結語

シュナイダーによれば、病的精神現象の成因は、まず、その現象が「了解可能」か否かによって、「正常からの量的偏倚」か「疾患（神経現象の意味律を破綻させる何らか異常過程）」かに分別される。新しい科学哲学はこのことの妥当性を支持している。ヤスパース・シュナイダーの精神病理学は、その後の生命科学革命後の新しい科学哲学からも、その妥当性が裏付けられることになったといえよう。

参考文献

科学哲学の現在について

伊東俊太郎(2014) 変容の時代(麗澤大学出版会)

精神病理学と新しい科学哲学について

豊嶋良一(2014) 「古典精神病理学」は「新しい精神の科学」でどう継承されるか
臨床精神医学 43(2) 121-129